



ウイメンズ ブックス 第43号

1992年
5月25日発行

Women's Books

ウイメンズ ブックストア

602 京都市上京区下立売通西洞院西入る

TEL.FAX 075-441-6905

発行所 有限会社 松香堂書店

振替貯金口座 京都8-7950

——女性の本と女性の為の情報をお知らせするウイメンズブック友の会会報——

(入会金500円 年会費個人1,800円 団体2,200円)

ウイメンズブック目録 (43)

このリストの書籍を御希望の方は、同封の振替用紙の通信欄でお申込み下さい。書籍代は送料共にお振込み下さいますようお願い致します。

ご注文の本の定価の合計額に、右の表の送料を合せてお送り下さい。なお、お電話でのご注文も受け付けています。

1,000円以下の場合	300円
1,001円～3,000円の場合	400円
3,001円～5,000円の場合	500円
5,001円～10,000円の場合	600円
10,001円以上の場合	700円

女性心理とセラピー

(50音順)

〔あ行〕

『アイデンティティーコンプレックス』

海原純子 大和書房 1990年 1140円

ストレスから逃げまわったり、他人に責任を押しつけたり、自分だけが苦勞しているという思いにとらわれたり、自分を「悲劇の主人公」にしている人は、いつまでたってもストレスには勝てない。働く女性のためのクリニックを開業している著者が幅広いアドバイスを与えてくれる本。

『愛しすぎる女たち』

ロビン・ノーウッド 落合恵子訳 読売新聞社
1988年 1545円

「愛」という名の自己犠牲、「愛しすぎ」から抜けだし、対等な愛のあり方を考えるセラピーの書。

『愛しすぎる女たちからの手紙』

ロビン・ノーウッド 落合恵子訳 読売新聞社
1991年 1600円
ベストセラー『愛しすぎる女たち』の姉妹編。前書に寄せられた手紙をもとに10章の項目に分類。類型の手紙によって再び「愛しすぎ症候群」「依存症」を考える好フェミニストセラピーの書となっている。

『青髭——愛する女性を殺すとは？』

ヘルムート・バルツ 林道義訳 新曜社
1992年2月 1700円
グリム童話「青髭」に秘められたきわめて現代的なテーマを鮮やかに読み解きながら、現代の男性と女性の問題を論じる。ユング心理学の好読みもの。

『アサーティブネス (積極的自己主張) のすすめ』

アン・ディクソン 山本光子訳 拓殖書房
1991年 1800円

「アサーティブ」とは積極的自己主張のこと。ヨーロッパ各地にアサーティブネス教室を開設し、成功を収めた心理カウンセラーの著者が、長年の抑圧的状况から、ともすればその反動で攻撃的になる女性もいるが、本書ではいい人間関係をつくる方法、自分が変わるための方法としてアサーティブを提唱。

『Yes But... フェミニズム心理学をめざして』

ジーン・ベーカー・ミラー 河野貴代美監訳
新宿書房 1989年 2472円

「そうかもしれない、でも…」このようなことをお互いに言い続ける再考のプロセス、それぞれ個別な生き方と分かちあい。いままで女性のマイナス面として捉えられてきた属性をプラスに変えていく11カ国で翻訳されたフェミニスト心理学の好著。

『ウェンディ・ジレンマ』

ダン・カイリー 小此木啓吾監訳
祥伝社 1984年 1545円

『ウェンディ・ジレンマ』は日本の女性像を一挙に粉砕するような衝撃力をそなえている。ウェンディのような大人になれないピーター・パンたちの母親役を止めて、自立した女性であるティンカー・ベルになりなさいと説く『ピーター・パン・シンドローム』の続著。

『ウーマンズ・ラブ—女性の間関係学』 村山久美子 創元社 1990年 1300円

現在の女性に大切なのは女性同士の協調性ではないだろうか。互いの人生を支え合える関係——ウーマンズ・ラブを積極的に評価しようとしたのが本書だ。小説の中の母娘関係と同性愛、心理学のレズビアニズム、映画の中の女同士、フェミニスト・セラピー、依存と自立のフィードバック。

『エイジング・コンプレックス』 海原純子 大和書房
1991年 1200円
エイジング(加齢)一年を重ねることによる自己喪失感、不安感を働く女性のためのクリニックを開業している著者が豊富な経験から「エイジングコンプレックス」と名づけて解き明かす。もう年だから、は逃避のはじまり、職場で深刻化するエイジズム、エイジングからの脱出法—エンジョイ・ユアセルフ。

『女なんてイヤ! 思春期ヤセ症を追う』
宮 淑子 朝日新聞社
1988年 1236円
‘女らしさ、という女性に付随する根源的な葛藤から生じる思春期の女性の問題をルポ。

『女はみんな女神』 ジーン・シノダ・ポーレン 新水社
村本詔司 村本邦子訳 1991年 2300円
女性同士が女性の多様性を受け入れ、相互の違いを尊重できるような関係を結び、お互いに新たな可能性を開く—本書はそのために有効なユングとフェミニズムの両方の視点に立って書かれた心理学書。まえがきで、グロリア・スタインムは、「どの女の心の中にも女神がいる」終章「女はみんなヒロイン」で、ギリシア神話の7人の女神の性格に女神の元型を求める。

『女らしさの病い 臨床精神医学と女性論』 齊藤 学
波田あい子編 誠信書房 1986年 2575円
精神医学の領域に性差研究会を設け、そこにフェミニストも参加。その活動と研究、そして臨床医学を加味して本論は編まれた。現代女性のジレンマ構造、女性の精神医療の現場から、アルコール依存症、性差と精神医学、対談・性差とフェミニズム等。

〔か行〕

『からだの声に耳をすますと』
ステファニー・デメトラコポウロス 横山貞子訳
思想の科学社 1987年 2472円
家母長という耳なれない言葉を駆使し、いま世界がどんなにこの家母長の知恵を必要としているかを説く。‘女のからだ、の体験にもとづく‘からだの知恵、と女の文化を語っている。

『からだ・私たち自身』 ポストン女の健康の本集団
藤枝滯子監修 荻野美穂・河野美代子校閲 松香堂
1988年 5150円 (図書館用特装版 12360円)
アメリカ女性運動の成果、「女のからだ」の改訂版の全訳が完成した。アメリカ女性のエネルギーとそれを日本の女性に伝えたい女性翻訳グループのエネルギーの結晶。豊富な図版と日本の医療情報。タブーや思い込みを取り払い、からだと性を理解するための百科全書的な本。

『拒食症 女たちの誇り高い抗議と苦悩』
スージー・オーバック
新曜社 1992年3月 2884円
女性は心が脅かされるときには自分の肉体を自己表現の手段としてコントロールしてきた。拒食症も自己主張の一連の試み。消費社会に翔奔される女性の身体イメージをセラピストが解説。

『結婚していてもなお孤独』 ダン・カイリー
深沢道子監訳 社会思想社
1990年 2500円
現代人の「孤独」に「独りものの孤独」のほかにも男性といっしょに暮らしている女性が襲われる孤独「いっしょにいても孤独」—LTL (Loving Together Loneliness) がある。この現代の病に関して『ピーターパン・シンドローム』の著者がその処方箋を提示する。

『こころの原点』
小此木啓吾 哲学書房 1991年12月 2200円
21世紀には、女性優位社会の到来が予感され、この変動の過程で描き出されるスーパーウーマン・イメージをめぐる父と母、夫と妻、そして親子の間が大きく揺れ動いている。その変化をどう読みとり、どうかかわったらいいか、その基盤となるべき心の原点を精神科医が分析する。心のリアリティ/スーパーウーマン・イメージ/老人と死/日本人と国際人他。

『心を病む女たち—狂気と英国文化』
エレイン・ショーウォーター 山田春子 蘭田美和子訳
朝日出版社 1990年 5200円
フェミニストの立場から見た1830年—1980年にわたる英国精神医学史であり、「女の病い」として女性を狂気と定義づけ、監禁してしまった医学界と社会の状況を探る。フーコの『狂気の歴史』に触発され、そこに欠落していた性と性差の問題に着眼したという。未来への希望はフェミニスト療法運動だという。狂気を「女性の病い」にする鎖は、女性が自らの鎖をひきちぎるまで、新たに鍛造されるのだ。

『コミュニケーション不全症候群』
中島 梓 筑摩書房 1991年 1500円
オタク、ダイエット、少女たちの少年愛趣味など、彼らの内側に分け入ってそれぞれの症状を読み解く好著。選別されオタクと化し、ダイエットをしなければ適応できない‘コミュニケーション不全症候群、の現代社会の病理を問う。

〔さ行〕

『女性心理学入門』 村山久美子 誠信書房
1987年 1854円
社会の中で女性はどう変わろうとしているのか、女性の生涯発達の心理学入門書。なぜ女性心理学を学ぶのか/女性をめぐる心理学理論/女性の生涯発達/女性のセックス/女性の精神障害/女と女/社会の中で女性はどう変わろうとしているのか他。

『女性たちのバーナウト—燃えつき症候群』
ハーバード・フロウデンバーガー 小此木啓吾訳
コンパニオン出版 1988年 1339円
「燃えつき症候群」という言葉を流行させた本の原著。

『女性と狂気』 P・チェスラー 河野貴代美訳
ユック舎 1989年 2060円
女性の狂気が精神分析理論や臨床においてどう扱われているのかを入院歴のある60名の女性‘患者、にインタビューし、その実態に迫る。

『女性の深層』

エーリッヒ・ノイマン 松代洋一 鎌田輝男訳
紀伊国屋書店 1980年 1600円

ユングは男性の中に女性的なものが存在し、女性の中にも男性的なものが存在することを示した。本書はこの知見をさらに深め、女性の心理的発達過程、女性的なものと創造性との関係、モーツァルトの「魔笛」の研究から母権の世界と父権の世界の対決と新たな統合された世界を示す。

『女性のための自己発見学』

河野貴代美
学陽書房 1986年 1339円
自己アイデンティティの確立をめざす女性のための自己分析、自立と自律へのアプローチ。

『自立の女性学』

河野貴代美
学陽書房 1983年 1339円
自己主張やCRのトレーニングによって真の自由と自立への道を示す心理の女性学のロングセラー。

『自立の心理学』

しま・ようこ
BOC出版部 1984年 1854円
ほんとうの自立とは何かを継続討論した心理学クラスの記録。能動的に聴き、率直に話す／日本のコミュニケーションを考える／遠慮、を点検する／お仕着せの自立論から真の自立に向けて。

『自分を変える本』

リン・ブルーム他著
河野貴代美・斉藤千代 訳
BOC出版部 1977年 1339円
どのようにしたら自分を確立できて、自己主張のできる人間になれるかをアメリカの心理学者たちの実験教室で行われた実例をもとに書かれたロングセラー本。さわかに自己主張する法が参考になる。

『自分を好きになる本』

パット・バルマー
eq Press訳 径書房 1991年10月 1545円
自分のことが好きになるためのヒントがいっぱい用意されたこの本は児童書なのだが、大人たちにも静かなブームを呼んでいる。本号13頁をご参照下さい。

『少女反抗期』

尾本直樹
学陽書房 1991年 1400円
女子の問題行動が統発する中学校。現場の教師が問題の現象、対応策、家庭教育のあり方など、甘えと自立願望のうずまく少女反抗期、に意欲的に取組んだもの。

『心理学は子どもの味方か?』

小沢牧子
ウイ書房 1992年2月 1500円
教育心理学を再考する試み。発達させられる者から、みずから生きる存在へと大人と子どもが共にどう生きるかを問う教育論。心理テストの実像、カウンセリングという管理について、親子関係論からの解放他。

『性幻想—ベッドの中の戦場へ』

河野貴代美
学陽書房 1990年 1380円
60名余りの女性たちへのインタビューを通して、女性の性イメージや幻想を探る。否定的な性イメージをもつものも多い。対関係をめぐる性幻想(異性愛、同性愛)、恋愛という幻想などから女性にとっての性の自立と解放

と性イメージ、幻想との関係を直視。

【た・な行】

『ダイエットってなんだろう』宮淑子著 小泉るみ子絵
岩崎書店 1992年4月 1300円
女子ばかりなぜやせたがるの? 「やせたい」気持ちの奥にあるものは何? 中・高校生の若い女性たちに向けて書かれた「からだ」の本。

『食べたい!でも、やせたい』L・ワイス 末松弘行訳
星和書店 1991年 2400円
過食症の認知行動療法。7週間の治療プログラムを紹介。

『誰にも言えなかった—子ども時代に性暴力を受けた女性たちの体験記』エレン・バス ルイーズ・ソートン
森田ゆり訳 築地書館 1991年 1700円
この本の中の女性たちは子ども時代に性的暴行、あるいは強姦を受け、もろもろの落とし穴や危険にもかかわらず、自らの体験を人に語る勇気をついに持ったために、生きる強さと尊厳を取りもどしたサバイバー(生存者)たち。

『血と言葉—被精神分析者の手記』

マリ・カルディナル 柴田都志子訳 リプロポート
1992年1月 1854円
精神分析の実態を被精神分析者の立場から克明に描いた世界10数カ国語に翻訳されたフランスの本。新装再版。

『逃げ腰症候群』

ソーニャ・ロウズ マーリン・S・ポタッシュ
翻訳工房「とも」訳 新水社 1990年 1800円
自立した女性にひかれながら、女性から求愛されると逃げ腰になってしまう現代男性の心理をニューヨークのサイセラピストが解明。古い男女関係から新しい男女関係に移行できない男たちのとまどいを三タイプに分け、より対等な親密な関係をつくるための具体的な処方がいっぱいだ。

『狙われる子どもの性』

ジュディス・エニュー
戒能民江他訳 啓文社 1991年 2200円
子ども買春・ポルノ・性的虐待など子どもの性の搾取の問題にメスを入れたイギリスの社会人類学者の書。分析の対象は欧米・中南米・東南アジア諸国。米軍と日本企業が買春を繁栄させるとの記述もある。人権としての子どもの性を考える力作。

【は・ま行・その他】

『引き裂かれた子どもたち』

—親の離婚と子どもの精神衛生—
池田由子 弘文堂 1989年 2060円
離婚家庭の子どもの事例を通して、夫婦の不和、離婚前夜、離婚後、母子家庭、父子家庭、復縁、再婚、などによって子どもに及ぼす影響、精神衛生などを考察。まわりの大人が適切な援助をすれば解決したのという子どもの事例が多いという。

『夫婦関係の精神分析』

ユルク・ヴィリイ 中野良平 奥村満佐子訳

法政大学出版局 1985年 2575円
愛し合っていた二人に突然やってくる葛藤や不満そして崩壊の危機。豊富な臨床例から恋愛—結婚—夫婦生活が崩壊してしまう道筋と要因を分析、解明する。

『夫婦関係の治療』

ユルク・ヴィリイ 奥村満佐子

法政大学出版局 1991年12月 4120円

前著『夫婦関係の精神分析』に続き、夫婦関係の具体的な治療の実際を明らかにしている。二人の間で無意識に演じられる自己愛的共謀関係がいかに男女関係を悩ませるか基本的要素を明かす。

『フェミニスト・カウンセリング』河野貴代美 新水社

1991年 2000円

フェミニストセラピーとは何か？ 日本でのフェミニスト・カウンセリングの草分けであり、第一人者でもある著者の12年間の実践活動報告。フェミニストセラピーの技法と課題、ケーススタディ、フェミニスト・カウンセリング実践団体一覧表他。

『フェミニスト・サイコロジー—女性学的心理学批判』

しま・ようこ 垣内出版 1985年 2678円

心理学領域を通してのフェミニスト・サイコロジー試論。男性主導方心理学の限界。セクシズムに立つ性差心理学批判、心理学の学際性とフェミニストサイコロジー。

『フェミニスト・セラピー—女性を知るために』

ルイズ・アイケンバウム スージー・オーバック

長田妙子 長田光展訳 新水社 1988年 1854円

著者たちは1976年ロンドンに「女性心理療法センター」を開設している。母と娘一体の女性の歴史、母親からの分離独立、フェミニストセラピーとは何か、カップルカウンセリングとレズビアン・カップル。フェミニズムや新しい女と男の関係を考える実践の書。

『母子癒着』

木村 栄 馬場謙一 有斐閣

1988年 1545円

母親の自己愛の変形ともいえる「母子癒着」。母親自身が自己実現と開かれた人間関係を持つことが必要である。

『ボディ・ワークのすすめ—からだと自己発見』

グラバア俊子 創元社 1988年 1339円

からだに対する意識を明確にすることは種々の偏見から自分を自由にするための一つの道である。対人間コミュ

ニケーションにおける非言語的表出としてのボディーランゲージについて、「自己の象徴としてのからだ」とは何か、からだの状態に対して敏感になるための解説・実践の書。

『マタニティ・ブルー』

郷久鉦二編 同朋舎

1989年 3605円

妊娠、出産からくるストレス。さまざまな不安を取り除くために心身医学的なアプローチが今ほど必要とされることはない。マタニティ・ブルーといわれる産後の心理、身体的不安定期について適切なアドバイスをはたす本。

『やせたい気持ちの心理学』

岡本浩一 日本文化科学社

1990年 1300円

肥満についての心理学。やせようと努力を実行に移す前に自分の心の総点検をするトータル・ダイエットのすすめ。

『ワークショップ人と人との「あいだ』

松井洋子 太郎次郎社 1992年 4月 1700円

人間関係のなかで受けた心身の傷は一度は癒されなければ歪みとなり、沈殿し、ありのままの自分を生きることができにくくなる。からだのワークを通して心を癒す「ここからからだの出会いの会」を主催する著者の本。

『私をつつむ母なるもの—イメージ画にみる日本文化の心理』 やまだようこ 有斐閣 1988年 4429円

私と母の関係を女子学生に絵で描かせ、いろんな母と娘の関係性を解説。

現代のエスプリ 278

「フェミニストセラピー」

編集 河野貴代美 平木典子 至文堂

1990年 1100円

概説 フェミニズムと心理療法の接点を求めて（河野貴代美）1920年代のパイオニアたち 女性をとりまく心理的環境 フェミニストセラピーの展開と実践報告他。

現代のエスプリ283 「ニューセラピー」

編集 稲村 博 佐藤悦子

至文堂 1991年 1100円

「ニューセラピー」をめぐって ひろがるセラピーの地平線。新たな治療的アプローチ（ボディワーク・スピリチュアリティ 東洋医学）他。



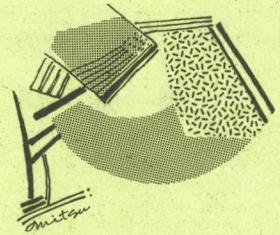
ウイメンズブックストアの10周年記念

パーティに、集って頂き有難うございました。

去る4月25日、ウイメンズブックストアと、この「ウイメンズブックス」誌の10周年を記念して、パーティを開きました（第42号で案内）。今まで支えてくださった方たちが集って、——10年も続いたのは奇蹟だ、いや、もって当たり前だ、これからもどこまで続くか——等々々、議論もたのしく、飲み、食い、笑いの賑やかな一夕でした。有難うございました。

おんなの本・韓国

〔連載第一回〕 市場 淳子



『あなたは朝鮮の十字架よ』 チャン・ジョンイム作

本年2月、韓国で、従軍慰安婦の歴史を綴った詩集が出版された。詩人チャン・ジョンイムの『あなたは朝鮮の十字架よ』である。チャンさんは、1948年生まれ。国軍看護士官学校卒業後、看護将校や女子高の教師として働いてきた。しかし1989年に、民主的教育を掲げて発足した「全教組」に加入し、解職された。以降は釜山で女性運動に専念。そこで初めて従軍慰安婦問題に出会い、大きな衝撃を受けた。以前よりフェミニズム文学に関心のあったチャンさんは、「芸術性より、憤怒すべき挺身隊の実像を知らせるために詩を書こう」と決心。資料や本や証言をつぶさに読んだ。そして37篇の詩を書き上げ、『あなたは朝鮮の十字架よ』が生まれた。

「史的事実には忠実でありたかった」というチャンさんは、従軍慰安婦が戦場で経験した生き地獄を克明に歌う。

助けて、助けて／助けて……母さん、母さん……／その記憶の他にはありません／知らない男が喘ぎながら／ズボンを降ろし飛び掛かるとき／おお、どれほど深い絶望と恐怖が／ハンイを気絶させたのか／あなたは想像できるでしょうか「色地獄の曼陀羅」▼ノルマに縛られた性の奴隷／50回、あるいは300回／精液を拭きながら死んで行きました「ノルマ」▼病が重ければ／獣のようにただ身を凍め／死を待ちました……母さん、母さんと空しく呼んで／遺言もなく死ねば／我が悲しみに痛哭する友たち／名も知らぬ地に／その骨の粉を撒いてやりました「病になれば」▼数百名の男たちを前に／にぎり飯をやった兵士と、精液を排出した兵士の間に／横たわってご飯を噛み、生殖器に子宮を開いてやりました「巡回慰安婦」

「函館の自殺岩」「天皇の軍隊」「軍隊慰安婦設置令」「従軍慰安婦1号」「奴隷狩人」などの詩では、日本軍によって戦場へ引っぱられて行き生(性)を踏みにじられた従軍慰安婦の、凄惨な歴史が生々しく蘇る。それらの詩は、元従軍慰安婦・金学順さんの証言を聞いた時のように、読むことに耐えながらでなければ読み進め得ないものばかりだ。

このようにチャンさんは、日本軍の蛮行を、潤色なく描き、神はどこかで眠っているのか／地はなぜ目をつぶっているのか／魔鬼のようにアジアの血を吸い／

世界に血で染った手を差し出した国の軍隊／その名も高貴な天皇の部隊に／今や経済大国の免罪符を与えられるのか(「天皇の軍隊」と、厳しくその罪を問いもする。

しかし、彼女が日本人に向ける矛先はあまりに柔らかい。そして過去を告発した日本人には▼教え子を挺身隊に送り一生つらい思いをした／老いた女性教師を許したまえ「おお神様」▼あなたが過ぎ去った過去に懺悔し／「私の戦争犯罪」で証言した時／私たちは涙で許した／あなたは今自由でこそあれ咎められはしないだろう(「吉田 清治」と、許しもする。

さらにチャンさんは、従軍慰安婦問題をもたらした家父長制度への憤りを、「父を否認しよう」「純潔は生命より小さきもの」「あの時の女性指導者たちは」などの詩に託す。女性のみならず純潔を強要し、自民族自らも、元従軍慰安婦たちの首を締めてきたことを鋭く問い詰め、強く反省を促している。その矛先は、▼民族の純潔を踏みにじった／挺身隊の謝罪は／どの国家でもなく／あなたたち男から始めなければならない(「男よ」と、特に男に向けて鋭い。だが、女に向かっては、▼帝国主義の銃剣の前に倒れ／軍国主義の蹄の下に凌辱された女よ／家父長制の鎖を足に引きずりながら、今も踏みにじられている女よ／世のすべての女の圧迫の悲しみに泣き／差別の憤怒に震えながら生きてきた／日本の女も、韓国の女も／まったく同じ悲しみに泣いたのだから／日本の女も私たちの敵ではない／女よ、女を庇って抱け／最も憤懣やるかたなき者の悲しみで／最も弱き者の悲しみで／互いに強く抱き合え(「女よ立ち上がれ」と、女性の連帯を呼びかける。けれども、日本の女性が、チャンさんが詩を通じて自民族に呼びかけた以上の深い反省を、自らに課さなければ、女同士だからと抱き合うことは出来ないであろう。

いま韓国では、テレビで、新聞で、小説で、詩で、映画で、「従軍慰安婦問題」が広く知らされている。その責任を取るべき日本ではどうだろうか？

青い森 190頁 1992年 ソウル

いちば じゅんこ

大阪外国語大学朝鮮語科大学院在学中
共著『女たちの世界文学』松香堂

事務局より

年度が変りました。1992年分の会費未納の方はお早めにお振込み願います。年会費 1800円です。住所変更、姓名変更等は(新、旧ともに)お知らせください。

— 女性のための —

最新刊案内

—1992年2月～
1992年4月及び
第42号未掲載分—

(価格はすべて税込)

[からだ・性・心理]

『主婦マリーがしたこと』 フランシス・スピネル
福井美津子 監訳 世界文化社
1992年4月 1500円

1943年7月30日、フランスの一主婦マリー＝ルイズ・ジローは望まない妊娠をして苦しんでいる隣人の墮胎に手を貸したとがで、国家裁判所から死刑の判決を下され処刑された。マリーが亡くなって30年後、1975年刑法墮胎罪は廃止され、妊娠中絶は合法化された。

『女の体の歴史』
エドワード・ショーター 池上千寿子 太田英樹訳
勁草書房 1992年2月 3296円
望まぬ妊娠、危険な中絶と出産、男にはない様々な病気と重労働、——独自の歴史をもった女性のからだがいづ
以来の重荷から解放されるまでの歴史的変遷。『性の歴史』 J・L・フランドラン 宮原信訳
藤原書店 1992年 5500円
フランスのアナール派の中心的存在であるフランドランの歴史の中の性に関する論文集。18世紀の愛と性、西欧キリスト教世界における避妊、結婚、愛情関係、閨房での男と女、子どもに関する新旧俚諺。アリエスの『<子供>の誕生』をめぐって 独身者の性生活 他興味深い性に関する多彩な考察。『新・ハイトリポート』
シエア・ハイト ケイト・コレラン 石井苗子訳
マガジンハウス 1992年4月 1800円
12年目の新ハイト リポート。4000名の男女のインタビューから考察された新しいセクシュアリティが興味深い。デート・レイプ、エイズ、女性を愛する他。『最新キンゼイ・リポート』
J・M・ライニッシュ R・ビーズリー
小曾戸明子 宮原忍訳 小学館 1991年11月
4800円

最新のキンゼイ研究所からの性知識調査のデータを駆使して性の悩みに科学的に答えた性の啓蒙書。2000名近いサンプル数のあるアメリカ人の性知識調査報告、性感染症について、パートナーとのセックス、ボディイメージと自己評価、性と心身障害について他。

『子どもを産む』 吉村典子 岩波新書
1992年3月 580円

今、お産のあり方は大きく変わりつつある。長年の離島や山村、韓国などでの調査や自らの三度の出産体験をふまえながら、これから産むひとたちのために「いいお産」とは何かを考える出産考。

『拒食症 女たちの誇り高い抗議と苦悩』
スージー・オーバック 鈴木二郎・天野裕子他訳
新曜社 1992年4月 2884円
本号特集目録2頁に既出。『ダイエットってなんだろう』
宮淑子 小泉るみ子絵
岩崎書店 1992年4月 1300円
本号特集目録3頁をご参照下さい。『ワークショップ人と人との「あいだ」』
松井洋子 太郎次郎社 1992年4月 1700円
本号特集目録4頁をご参照下さい。『CRグループとは何か？
——輝やくシスターフードに向けて』
田上時子 (株)わかつたぶらんにくぐ
1991年11月 800円
シスターフードはパワフル、シスターフードとフェミニズムの歴史、CRとはを語る講演録。『自分を好きになる本』
バット・パルマー eqPress訳 径書房 1991年10月
1545円

自分のことが好きになるためのヒントの数々。『自分自身を好きになれば、みんなと友だちになれる！、子ども向きの絵本なのだが、大人たちの間で静かなブームを呼んでいる。

[女性史・評伝]

『女性史は可能か？』 M・ペロー編 杉村・志賀監訳
藤原書店 1992年5月 3800円
フランスの女性史研究の成果を踏まえ開催された新しい女性史のあり方と歴史的視点の本質的転換を示唆するシンポジウムの記録。『ジェンダーと歴史学』
J・W・スコット 荻野美穂訳
平凡社 1992年5月 4500円
フェミニズム歴史学の本格的理論書。性差の知的構築過程と、そこで歴史学が果たしてきた役割がくっきり浮かび上り、思わず納得。女性史研究者には必読の本だ。『日本中世女性史の研究』
脇田晴子 東京大学出版会
1992年5月 4944円
日本中世における男・女の性別役割分担をテーマに、中世的な「家」や中世社会の構造分析に新しい視点を展開した中世女性史研究。『従軍慰安婦・内鮮結婚』
鈴木裕子 未来社 1992年3月 1854円
近代女性史に欠落していた女性の「性の侵略」の歴史を追いつづける著者が資料的検証を加えて日本の朝鮮への

植民地支配政策、慰安婦政策、内鮮結婚を検証する。また、従軍慰安婦問題について論じた「従軍慰安婦に軍と国家は関与しなかったのか」他。

『従軍慰安婦——元兵士たちの証言』

西野留美子 明石書店 1992年4月
1700円

強制連行されて日本にきた鄭さんとの出会いが従軍慰安婦の聞き取りを始めるきっかけとなったという。百人以上の元兵士たちが重い口を開いた迫真の証言集。貧しい弱い立場のものが犠牲になってゆく差別構造がはっきり見えてくる。

『続 慰安婦たちの太平洋戦争』

山田盟子 光人社 1992年3月 1700円
反響をよんだ従軍慰安婦に関するノンフィクションの第二弾。日本人慰安婦に関する記録。

『母・従軍慰安婦』

——かあさんは「朝鮮ビー」と呼ばれた』

尹静慕 鹿嶋節子訳
(財)神戸学生青年センター出版部
1992年4月 1030円

従軍慰安婦をテーマにした韓国女性作家による小説。巻末に付録従軍慰安婦女子挺身隊文献資料あり。

『人形の家を出た女たち 20世紀イギリス女性の生活と文化』

アンジェラ・ホールズワース
石山鈴子 加地永都子

新宿書房 1992年3月 3000円

著者が関わったイギリスBBCで放映されたドキュメンタリー特別番組「out of the Doll's House」シリーズの出版化。20世紀イギリス女性の家事、教育、仕事、母親業、セックス、平等などを記録した好著。女性の視点でみた英国現代史として興味深い。

『われらアメリカの女たち——ドキュメント・アメリカ女性史』

ベス・ミルステイン・カバ
ジーン・ボーデン 宮城正枝 石田美栄訳
花伝社 1992年1月 2200円

これはアメリカで使われている高校生の女性学の教科書。アメリカ史の中ではたした女性の役割、法律的社会的女性の地位の向上に貢献した女性たちをアメリカ史の中に発見する作業。

『日系アメリカ女性——三世代の100年』

メイ・T・ナカノ
サイマル・アカデミー翻訳科訳 サイマル出版会
1992年2月 1700円

写真花嫁として渡米し、家族のために働きつづけた一世女性。第二次大戦で青春を翻弄され日米両国のはざままで苦悩した二世、88%の三世が何らかの形で大学教育を受け、アメリカ化が進む中で、アメリカ社会での新たな役割を模索する三世。在米日系人100年の歴史を支えた女たちの人生記録。

『江戸の花嫁』

——婿えらびとブライダル』

森下みさ子 中公新書 1992年2月 600円

江戸時代の大都市の妙齡の娘たちの関心事は「嫁入り」。様々な婚姻模様を通して江戸の生活の断面を描き出す好読み物。見合い、仲人、結納、持参金、婚礼、離縁、嫁入り外の娘たち他。

『三くだり半と縁切寺』 高木 侃 講談社現代新書

1992年 3月 600円

江戸時代の離婚事情を検証。江戸時代は妻の「飛び出し離婚」が多く、決して、タブー視されていなかったとか。離婚状の実際と縁切り寺の記録、当時の女性の地位を考える。

『医の神の娘たち——語られなかった女医の系譜』

コンスタンス・ジョエル 内村瑠美子訳

メディカ出版 1992年2月 2400円

フランスの医療ジャーナリストが書いた女医の歴史書。修道院の医学、男装した軍属の女医、医学部開放までの困難な道のり、爆発的進展の現代、現代の女医のプロフィール他。

〔女性論・フェミニズム〕

『女性学への招待』

井上輝子 有斐閣 1992年4月 1545円

女性学を学習し、実践し、創造していくために書かれた女性学への「招待」の書。ウーマンリブから書き起こされ、女性学の誕生、女の子はつくられる、教室の中での性別の形成、恋愛と結婚、母性信仰、職場における性差別、主婦とは何か、変わる女の一生、女性学のセカンドステージ他。

『女性学 創刊号』 日本女性学会学会誌編集委員会編

新水社発売 1992年4月 2000円

拒食症をめぐる(河野貴代美) 生殖の自己決定権と日本の政策決定(岩本美砂子)〈主婦〉の誕生—日本の場合 学会12年目に寄せて 書評他。

『男は女 女は男』

エリザベート・パダンテール

筑摩書房 1992年 2月 2990円

男女の相違より類似が強調される両性具有の時代へとフランスの哲学者であり、『母性という神話』(『プラスラブ』の改題)のパダンテールは誘導してくれる話題の書。

『女性とメディア』

加藤春恵子 津金澤聰廣編

世界思想社 1992年4月 1850円

全国のマスコミ現場で働くものと、研究者による共同参加型「女性とメディア」をめぐる紙上フォーラム。女性の人権とマス・メディア、放送の男女平等をめざす世界の潮流、女性雑誌に見るフェミニズム、フェミニズム出版、この10年、ウイメンズブックスストアから(中西豊子)、新聞・放送メディアと就職問題など多彩な内容。

『母性の社会学』

船橋恵子 堤マサコ サイエンス社

1992年3月 1751円

「母性」を社会的に捉えようと試みられた母性研究の力作。現代社会から押しつけられる「母性イデオロギー」からの解放と同時に、主体的選択的に「母性」を生きるこの自由をも併せて念頭におきながら、日本的母性の変遷、「母性」概念の再検討、産育保障をどうするか、母性形成の社会的条件について考察。参考文献リストが豊富だ。

『出生率はなぜ下ったか』

E・ベック=ゲルンスハイム

香川檀訳 勁草書房 1992年 2月 3090円

実によく書かれた出生率に関する重要な本だ。下記の「続

「ドイツと女たち」と併せて読むと効果的だ。日本の「1.57ショック」を先取りした旧西ドイツの実状と政策をフォローしながら男女平等の新しい家族像を展望する、かつて本誌「おんなの本・西ドイツ」で紹介されたこともある本の翻訳でもある。

『統一ドイツと女たち』 姫岡とし子 時事通信社
1992年4月 1600円

統一ドイツ後の旧東ドイツの女性たちの家族・労働・ネットワークなどの生の声をレポート。経済再編の変革期の旧東ドイツをフェミニズムがどうとらえたか興味深い内容。失業率は高いが、それでも「家庭には戻らない」という旧東ドイツの女性たちの専業主婦願望はわずか3%だという。子育て、女性起業家の誕生、女性運動の現在、補論「一つのドイツ、二つのフェミニズム」、分裂の40年が女性にもたらしたもの他。

『文化のなかの女と男』 山村嘉己 大越愛子 源淳子 山下明子
嵯峨野書院 1992年4月 2369円

女性学と文学——文学の中の女と男／フェミニズム理論の現在／浄穢思想と女性差別など女と男の文化再編試論。

『新しいコミュニケーションとの出会い』
ラモナー・R・ラッシュュ ドナ・アレン編 村松泰子編訳
垣内出版 1992年4月 2678円

女性とコミュニケーションの問題を既存のメディアや新しいオールタナティブ・メディアによる実践の紹介や分析、そして将来の展望をわかりやすくまとめたもの。マスコミについてのフェミニスト研究の必要性／女性ジャーナリストの両刀の剣／ハイテクメディアは女性の入力待っている／メディアの中の女性の未来／女たちの出版社／コミュニケーションと開発（女性たちの輪）

『性というつくりごと』 伊奈正人 鮎京正則編
勁草書房 1992年2月 2884円

岡山大学の総合科目「女性論と男性論」を中心とした学際的な考察。生理・病理としての性、制度・問題としての性、文化・歴史としての性、思想・スタイルとしての性。

『日本における女性——日本思想における重層性』
山折哲雄編 名著刊行会
1992年1月 2000円

国立国際日本文化研究センターの共同研究「女性」に関する研究論文集。女性化した男をとりかむ女性たち——普賢十羅刹女像をめぐる（山折哲雄）結婚と女性（佐伯順子）戦時下の著『武家の女性』に見る思想家山川菊栄の横顔（ケイト・ナカノ）対談不倫社会の神話と構造（井上章一 森岡正博）

『グリーンナムの女たちの闘い』
——核ミサイルを止めた十年——
グリーンナムの女たち著 近藤和子訳・解説
オリジン出版センター 1992年4月 1900円

グリーンナムのピースキャンプに住む女たちはキャンプ10年目に非暴力直接行動の力によって核ミサイル100基を撤去させた。核＝暴力＝男社会がなくなる限り、女の平和は来ないというグリーンナムの女たちの闘いの記録。

〔結婚・家族〕

『現代家族のルネサンス』

布施晶子 玉水俊哲 庄司洋子編
青木書店 1992年3月 3090円

いま、日本の家族はなぜ不安定化を増し、形態を多様化させているのか、現代家族の蘇生（ルネサンス）に向けての試行錯誤する家族のあり方、あり様を考える充実した一冊。第一部 いま、世界の家族は（アメリカ、イギリス、スウェーデン、ソビエト、韓国）いま、日本の家族は 日本における夫婦の現在 現代の親子 現代の老親・子 「豊かな社会」の階層分化と家計構造 現代家族のルネサンスに向けて他。

『メタファーとしての家族 シリーズ変貌する家族⑦』
上野千鶴子 鶴見俊輔他
岩波書店 1992年3月 2700円

メタファーとしての家族（栗原 彬）
家系と家格（橋本敏子）
血の民族学 モデルとしての家族 天皇制と日本人他
日本人の意識の深層に流れる家族の原理を洗い出す。

『離婚の比較社会史』

有地享 老川寛編 三省堂
1992年4月 3600円

日本と外国の離婚の実態を考察した研究書。日本における離婚の比較研究の足跡、日本中世、江戸、明治前期の離婚と離婚法、ソ連、フランス、ドイツ、アメリカの離婚、日本の離婚、日本の離婚と子どもの実態、離婚に関する文献目録。

『ふたりで家事を——「仕事」と「家庭」の新しい関係』
尼川洋子 創元社
1992年4月 1400円

ふたりで家事・育児もする、夫婦の実際面を20代から50代の10組の共働き夫婦にインタビュー。性別役割分業を脱した夫婦と家族のあり方を描くワーキングカップルのための参考書。

『ゆらぐ大人＝男性社会』 望田幸男 大西広
有斐閣 1992年5月 1545円

『親ばなれできないかもしれない症候群』
宮子あずさ 海竜社 1992年2月 1000円

フェミニスト・ジュニアの著者（吉武輝子の娘）が母と娘の関係、親ばなれの苦しい葛藤とパートナーシップ、女の自立と職業生活を語る好エッセイ。とても正直な本だと思う。

『老いの自立と幸せ ——福祉社会を生きる女たち』
沖藤典子 労働旬報社 1992年2月 680円

デンマークの老いの自立のあり方を学ぶ報告。個人の自立こそ幸せ。「社会的親孝行」をめざす福祉を！

『夫と妻の間学——愛と性の成熟を求めて』
近藤 裕 創元社
1992年4月 1400円

結婚の意味、あり方を問う人が増えている現在、結婚観の近代化による夫婦間の葛藤が多くなっている。結婚における自己実現、夫婦における成熟した愛と性を考える。

『国際結婚ガイドブック』

森本和美 明石書店 1992年3月
1600円

ボーダレス時代の国際家族のためのガイドブック。著者は「国際結婚を考える会」の発起人。結婚篇、在留資格、登録篇、国籍篇他。

『国際結婚物語』

川滝かおり 廣済堂出版
1992年1月 1500円

自分らしい生き方をしたいという思いと、国際結婚とは深い関係にある。著者自らの体験をまじえながら10組の国際カップルを通して結婚を考えるルポルタージュ。

『嫁——ほんとうに義親を看とりたいですか……』

上野いく子 ユック舎 1992年4月 1545円

「先のことはわからないけど。家族に頼るのではなく、一人で生きていける力を育てよう」、義母の看とりから学んだ共働き核家族の著者。介護と仕事の狭間で悩み揺れる「嫁」としての葛藤。仕事をつづけながら義母を看取った著者からの高齢化社会に働く女性へのメッセージが痛くてしかも暖かだ。

〔労働・法・経済〕

『セクハラ事件の主役たち』

金子雅臣 築地書館 1992年4月 1494円

20年間都庁で労務相談に関わってきた著者によれば、セクシュアル・ハラスメントの加害者「ハラッサー」は、決して世にいうやりそうな風貌のオッサンではない。普通の夫であり父である、仕事上の評価もきわめて高い男性であると。職場での男たちの現在、独りよがりの性、男たちの合意と誤算、セクシュアル・ハラスメントを生む土壌など男性側の問題点を鋭くリアルに浮き彫りにしている。

『お茶くみの政治学 ビースネットブック⑥』

お茶くみの政治学実行委員会編

ビースネット企画 1992年2月 500円

どうしていつも女性だけがお茶くみの？日本の職場から女だけのお茶くみを撤廃させようと呼びかけた女性職員たちの主張。

『自分にやさしい働き方しませんか』

ヤンソン由実子 中嶋圭子

渥美京子 青山栄子 学陽書房

1992年3月 1400円

女性がいまいる職場で無理をせず、自分のペースで働くためのノウハウを列記した親切なガイドブック。からだの問題、労働災害、人間関係をスムーズにする上手な自己主張、女と男の知恵くらべ、どうする？こんなときQ&A。

『ただいま育児休業中』

笠章子 主婦の友社 1992年3月
1000円

健康飲料「ファイブミニ」を開発したキャリアが1年間の育児休業体験をつづる。

『「総合職」の研究 '93年度版』

杉山由美子 実務教育出版
1992年2月 1000円

『むらを動かす女性たち』

農村女性問題研究会 家の光協会
1992年4月 2400円

評論家の故丸岡秀子さんを中心にした農村の女性について考える研究会が農村女性の当面する困難な課題の解放を探る一冊。農家の女性の経済的地位(中島通子)農村の高齢化問題と女性(向井承子)農村女性のビジネス起こしと社会参画 海外における女性農業者の立場他。

『女がビジネス社会をわたる法』

野原蓉子 廣済堂出版 1992年3月1500円

『男女雇用機会均等法及び労働基準法施行便覧』

労働省婦人局 婦人政策課編
1991年5月 800円

『育児休業法のポイント』

女性職業財団 1992年2月 450円

『まんがで解説！育児休業法』

労働省婦人局婦人福祉課監修
第一法規出版社 1992年4月 600円

『女性能力活用事例集 No. 2』

——職場いきいき・かがやく女性』

財団法人女性職業財団 1991年3月 1200円

〔表現・ノンフィクション〕

『女が読む日本近代文学——フェミニズム批評の試み』

江種満子 漆田和代編 新曜社 1992年 2266円

日本の文学作品に深く分け入り、丹念なフェミニズム批評を試みた一冊。『暗夜行路』の深層、闘う「父の娘」—樋口一葉 駒子の視点から「雪国」を読む 母性幻想を織る男—『眠れる美女』他。「フェミニズム批評に懐疑的な人にも説得力をもつようなテキストに即した読み」を目指したという執筆者は編者の他に田嶋陽子、千種ステイーブンなど。

『知られざるジョージア・オキーフ』

アニタ・ポリツァー

荒垣さやこ訳 晶文社 1992年3月 3600円

「女性ならではの、またアメリカのみが生まだすことのできた、注目にあたいする絵を半世紀にわたって創作しつづけた画家オキーフ。生涯の友がつづる回想的評伝。

『女・アート・イデオロギー』

グリゼルダ・ポロック ロジカ・パーカー 萩原弘子訳
新水社 1992年4月 4429円

フェミニストが読みなおす芸術表現の歴史。100点余りの図版を駆使し、女とアートとイデオロギーの相互関係を分析し、アートにおける女性の位置を明らかにするフェミニスト美術批評。

『P・D・ジェイムズ コーデリアの言い分』

現代イギリス女性作家を読む③』

現代女性作家研究会編 1992年2月 2369円

『バーニス・ルーベンス 愛憎の迷路』

現代イギリス女性作家を読む④』

現代女性作家研究会編 1992年3月 2369円

『アンジェラ・カーター ファンタジーの森
現代イギリス女性作家を読む⑤』
現代女性作家研究会編 勁草書房 1992年4月 2369円

『ニュー・フェミニズム・レビュー③ ポルノグラフィ—揺れる視線の政治学』
白藤花夜子編 学陽書房 1992年 3月 1600円
視線の性=政治学(上野千鶴子)
モードとポルノのあやうい関係(山田登世子)
ポルノ表現にフェミニズム批評は可能か(水田宗子)他。

『クレヨンハウス物語』
落合恵子 徳間書店 1992年 4月 1500円
クレヨンハウスに関する77の質問、「クレヨンハウス通信」より、絵本、子どもに学ぶ、ほかクレヨンハウスからのメッセージ集。

『生きて生きて』
山崎朋子 海竜社 1992年3月 1300円
山崎朋子エッセイ・評論集。私の転機/『サンダカン八番娼館』追想/アジア女性の交流/国際結婚から見た日本語他。

『いのちに光あれ—女性史と差別』
もろさわようこ 径書房
1992年2月 1648円
女性差別と部落差別について語った講演をもとにまとめた本。

『新聞記者取材した』
斎藤茂男 岩波書店 1992年3月 1300円
報道の最前線取材して書かれたルポルタージュ風ジャーナリズム論。記者の自由な発想が抑制されてしまっただけの考え方を再検証していく発想の逆転が行われにくい現状—ジャーナリズムの老化を指摘。男本位制の牙城の中で女性記者は? 記者が「女」である意味は何かにも至言。

『ルイ・ヴィトン大学桜通り』
松原淳子 講談社
1992年 3月 1300円
「母は無印、娘はルイ・ヴィトン大学」といった風なブランド大学をめぐる若い女性と母親たちの実態をルポし女性にとって学歴とは何かを考える。ブランド大学を出た女性にとって学歴とは何だったのだろうか、どう生かされているのだろうか?

【資料・雑誌】

週刊朝日臨時増刊
「がんばって!ワーキングマザー」
1992年4月 480円
保育、再就職からマネープランまで。有名ワーキングマザーへのインタビュー、121人のアンケート、ナマの声。双子のお母さんになった猪口邦子さんへのインタビュー他。

『図説 日本人の生活時間 1990』
NHK世論調査部編
日本放送出版協会 1992年 2月3200円

別冊宝島155「みんなの不倫」
JICC 1992年5月 1010円
中流奥様族の反乱(和田好子)
不倫の社会心理学的コーサツ(小浜逸郎)
妻子ある男との恋に悩むあなたへのセラピー(金盛浦子)
戦後「不倫」進化論(山下悦子)他。

神奈川評論第11号「特集 女性学・フェミニズム」
神奈川大学評論委員会 1992年2月 500円
座談会「現代社会とフェミニズムの可能性」
金井淑子 vs 丸山茂
「フェミニズムは何を求めるのか?」江原由美子
「20世紀末の性について」森崎和江他

あごろ171号
「特集 衣裳を替えれば意識も変わる?」
あごろ編集部 1992年2月 680円
ブームの`婦人、から`女性、へ
座談会「言葉が替われば意識も替わる?」
新しい酒を新しい草袋に替えりゃそれでいいか?(寿岳章子)他。

月刊女性情報
パド・ウイメンズ オフィス 各2500円
2月号 従軍慰安婦問題Part II
3月号 冬季オリンピック 現代男性像Part II
4月号 育児休業IV

季刊女子教育もんだい「50号記念別冊 女と男・どう生きる・90年代」
1992年4月 1000円
労働教育センター
変わりゆく女性労働、多様化する家庭・家族、教育の中の女と男、ともに生きるアジア、政治を拓く。

【文庫になった本】

「元始、女性は太陽であった①②③④」
平塚らいてう 大月書店国民文庫 各930円

「魂にふれるアジア」
松井やより 朝日文庫 530円

… 絶版情報 …

「女の自立・男の自立」 管孝行 毎日新聞社
「女の戦後史I」 朝日ジャーナル 朝日新聞社
「近代女性精神史」 河野信子 大和書房
「家庭のない家族の時代」 小此木啓吾 集英社
「戦争を生きた女たち」 鞠谷美規子 ミネルヴァ書房
「主婦の誕生」 アン・オークレー 三省堂
「試験管の中の女」 リタ・アルディッティ 共同通信社
「ピタースイート」 S・オーバック 主婦の友社
「引っこみ思案をなおす本」 河野貴代美 PHP
「ふたつの文化のはざまから」 加藤シヅエ 青山館
「婦人論」 ベーベル 岩波文庫
「魔女的文学論」 駒尺喜美 三一書房
「変貌する農村と婦人」 丸岡秀子 家の光協会
「ウーマンズ・セックス」 キッシンガー 主婦の友社
「ランソン先生のからだの本」 ランソン 亜紀書房

《あなたの情報・私の情報》

『出生率はなぜ下がったか—ドイツの場合』
(勁草書房) が出ました。

香川 植

いまを去ること6年前、「ウイメンズブックス」第20号の「おんなの本・西ドイツ」でご紹介した、出生率低下問題についてのドイツ書が、ついに翻訳刊行のはこびとなりました。

旧西ドイツは1985年、合計特殊出生率1.28という史上最低値を記録し、日本の1.57ショックを先取りするような出生率論争がまきおこりました。女性の社会進出を少子化の原因として非難するようなムードが高まったのに対し、そのカウンターパンチとして書かれたのが本書です。

この本でとくに面白いのは、出生率低下というテーマを扱うさいの、人口学や行政サイドの「マクロの視点」と、家族研究やフェミニストサイドの「産む側の論理」とをぶつけ合わせ、前者の盲点を鋭くついているところです。ドイツ女性のパワーとウイットあふれる母性論議——ぜひ一読を！
(定価3090円)

いろいろ見えてくる女のミニコミ「マイマイ族」第21号が完成しました。

鈴木 美和子

住む地域を変えることは、女性に何をもたらすのでしょうか。動機は、結婚、仕事、夫の転勤など様々ですが、環境が変わればそれぞれ文化摩擦が発生し、特に保守的で排他的な地域に少数派の「よその」として入っていった場合のカルチャーショックには、筆舌つくし難いものがあります。本号での特集「女の引越し」は7人の体験報告から成り、考えさせられる材料が豊富です。

新潟～東京二極編集の「マイマイ族」では今回、女性歴史学者による講演「なぜ新潟は裏日本化したのか」を収録しました。明治初頭まで豊かな大県であった新潟が政府により疎外されてその地位から転落、「新潟名物、女郎に女工、三助」と言われるまでの過程が語られました。あの田中角栄を熱狂的に支持した県民感情の背景を考える上での手がかりとなる、貴重な資料です。

その他、シリーズ「雪国の女」、私のまち（山形県小国町）、ねこまんま（猫新聞）等々盛りだくさんです。

(B5判・50ページ)

連絡先：〒201 東京都狛江市東野川4～26～14

鈴木美和子

*松香堂で扱っています。(定価 300円、送料別)

フェミニスト企画集団からのお知らせ
'92年間テーマは「企業システムと女性」です

小川 真知子

京都市社会教育総合センター、春の講座は「女と仕事——働きさえすれば自己解放なのか」と題し、女の労働を「壁」を切り口に探ります。

6月13日(土) 14:00～16:00

講師：津田塾大学教員 金城清子

年収100万円の壁——女を枠にはめる法制度全般を分析し、女の労働を考える。

6月27日(土) 14:00～16:00

映画「女たちの報酬」鑑賞とトーク・トーク

7月11日(土) 14:00～16:00

講師：カウンセラー 川喜田好恵

妻・母という壁——働く女を縛るイメージその社会的重圧を掘り下げる。

恒例、夏の女性学シンポジウム

7月12日(日) 10:30～15:30

「フェミニズムと日本株式会社」

基調報告・パネラー

落合恵美子 「日本株式会社批判」批判

斎藤茂男 男たちを縛る魔ものの正体?

竹中恵美子 人間らしい労働の視点から

女と男の役割の在り方を変える——個人的努力をも吞み込む「企業論理」に疑問を突きつけ、新しい価値観を提案したい。

参加費 2000円 学割1500円

場所・問い合わせは 京都市社会教育総合センター

(075-802-3141) 津田

フェミニスト企画集団 (0726-73-3356) 小川

『母・従軍慰安婦——かあさんは「朝鮮ピー」と呼ばれた』をぜひお読み下さい!

鹿嶋 節子

両親の過去に暗い影をおとす日本の朝鮮植民地支配、父の死によって初めて知らされた両親の過去。それはあまりにも衝撃的な日本軍の朝鮮人戦時動員政策の実態だった。

韓国の女性作家が従軍慰安婦問題に迫った小説の日本語訳。巻末に文献リストと解説「学徒兵と従軍慰安婦」を付記したタイムリーな緊急出版。御一読を!

尹静慕作 鹿嶋節子訳 神戸学生青年センター出版部

Tel. 075-851-2760 定価1000円

*松香堂でも扱っています。

＝ スウェーデン通信 ＝

政権交代後の
高齢者福祉のゆくえ

山井和則

昨年8月から私はスウェーデンに来ているが、これは妻・斉藤弥生のおかげである。彼女がスウェーデンの Lund 大学政治学部大学院に入学したので、私も彼女の扶養家族として、スウェーデンについてきた。妻の留学に夫がついてゆくの珍しいせいか、友人たちからは「男として、おまえは恥ずかしくないのか？」と冷やかされた。私は扶養家族であり学生証もないが、幸運にも、彼女の指導教官が、私の研究も指導してくれている。ちなみに、彼女の研究テーマは「北欧の女性の政治参加」であり、後日この欄にも登場させて頂くことになっている。

私はこの8ヵ月間「政権交代後の高齢者福祉のゆくえ」について研究してきた。昨年9月の総選挙で、政権が社民党から保守系政党に移った。日本のマスコミの多くは「スウェーデンの福祉後退」と報じたが、その真偽を確かめなかった。今までにわかったのは、スウェーデンでは各政党間で高齢者福祉対策の差があまりないこと。さらに逆に、今年1月から「エーデルス・リフォーメン」という大改革を行い、老人病院の個室化や痴呆性老人向けグループホームの増設（5年以内に3000ヵ所）などと高齢者福祉に益々力を入れているということだ。

「世界不況の今日、高齢化率が18%にも達しても、まだ高齢者福祉に力を入れれば、財政が破綻するのではな



(高齢者福祉について議論する Lund 市議会。65人中25人が女性議員だ。)

いか？」と、私は素朴に疑問に思った。しかし、話しはそんな単純なものではない。例えば、景気が悪いからと言って、ホームヘルパーや老人ホームを減らしたら、その結果はどうなるだろうか。それこそ痴呆性老人や寝たきり老人が増え、その人たちが病院に流れ、入院医療費がかかり、結果的には、福祉・医療のトータルの行政コストは高くなるのだ。だから、超高齢社会では、下手に福祉を切り下げると、逆に長期的には財政が破綻するのだ。「福祉充実、財政破綻を招く」という論理は、超高齢社会には成り立たない。それどころか「高齢者福祉を充実させないと、財政が破綻する」というのが、新しい時代の論理である。

スウェーデンほど高齢者福祉が進んでいる国ですら、福祉の遅れが医療費の不必要な増大を招いていたという反省が出てきたくらいだ。今の日本では、福祉の遅れが結果的にはどれほど医療費の増大と税金の無駄使いにつながっているかは明らかである。

さらに、私がショックを受けたのは、スウェーデンの高齢者福祉が急速に整備されたのは、1970年代以降という、オイルショック後の不景気な時期であったことだ。皮肉にも、日本で「福祉充実、財政破綻を招く」と盛んに福祉国家批判が行われた頃である。その頃、時代の先を見通し、日本でも高齢者福祉を充実していれば、寝たきり老人・痴呆性老人は今の半分に減らせていただろう。それも、今と同じ福祉と医療のトータルコストで。

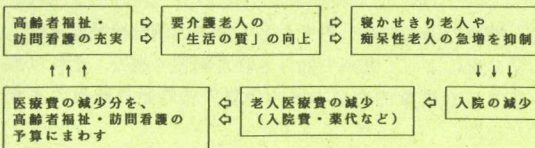
日本が今のスウェーデンと同じ高齢化率18%になるのは2002年。その頃には日本人もやっと「福祉充実を急がないと財政が破綻する」と実感するだろう。しかし、それでは遅すぎるのである。

*本研究は財シニアプラン開発機構から研究助成金を得た研究であり、詳しい研究レポートは財シニアプラン開発機構から冊子として出されています。

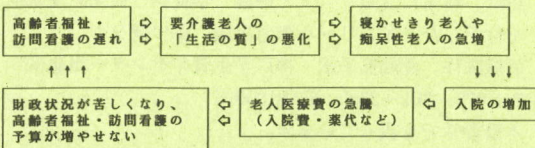
やまのい かずのり (在スウェーデン)

著書『体験ルポ 世界の高齢者福祉』(岩波新書)

(好循環のパターン：将来の日本のあるべき姿)



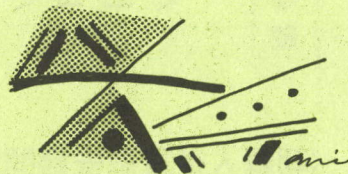
(悪循環のパターン：今の日本の現状)



リポート

大人が、まずハッピーでなきや

—児童文学とフェミニズム



石田見子

私は日頃、たくさん子ども達と付き合いながら、彼等がハッピーでいて欲しいと思っている。ハッピーになるために、自分に見切りをつけないで、自分の存在を肯定し、自分の生き方を自らの意志で選択して欲しいと思う。でも現実には、なかなかうまくはいかない。男だから、女だから、自分に能力がないからと一つ一つ諦めざるを得なくなる。彼等の前を歩いている大人が、まずハッピーでなければ、そして、子ども達をがんじがらめにしているものを外してやるのが大事なんだと思う。

児童文学と長年かかわってきて、児童文学が彼等の心を解放できたらどんなにいいだろうと思っているが、残念なことに、児童文学自身が子ども達を縛りつけてしまうことがある。とくに、日本の作品は、外国の作品に比べてパターン化されていて、男と女・夫と妻、親と子・老人が、それぞれの役割を演じて、らしさ、の中に閉じこめられている。中年の男女は、いつもお父さん、お母さんで、役割からはみ出して一人の人間として生きようとするとう問題が生じてしまう。大抵の場合は、役割のなかに戻って問題が解決する。日本の社会通念を反映しているといえ、それまでだが、女性が人間として生きようとするのが、まわりや子供たちにとって不幸にはつながるとは限らないことがもっと書かれてもいい。子供たちが暮らしている社会のルールは、皆が生き易いようにいくらでも変えられるのだということをもっとハッキリと書いてもいいんだと思う。勿論、その前に、大人の私達が、そういう社会にむけてどの様に働きかけているのかを問われるだろう。

『自分を好きになる本』(径書房)は、アメリカの子どものために書かれた本で、訳者あとがきで「この社会の中のさまざまな問題や否みを解決する糸口は、まずとはにかく『自分を好きになること、の中にあると、この本は教えてくれているのだと思う』と書いている。「ああ、そうなんだ」とあらためて心にストンと落ちてくる本だ。例えば「男らしいということは、キングコングになるようなもの。女らしいということはニコニコ人形になるようなもの。だけどもあんまり長い間自分のくきもちに知らんぷりしていると何も感じなくなる」「人を好きになることは相手を自分の思い通りにすることではない」——当り前の言葉だが、その当り前のことが案外難しい。人間として素直に感じるままに生きていけばいい。この本を読んで、私は深い息を吸い込んだような気がした。

子ども達は、社会のつけを間違いなく皆負わされるのだから、日本の児童文学も、社会の動きに敏感であって欲しいと思っていたら「日本児童文学5月号」で「児童文学とフェミニズム」の特集を組んでいた。フェミニズムに対して及び腰の男性が多い中で児童文学にかかわる男性が、戸惑いも含めて率直に発言しているのが興味深かった。

「男だってつくられるんだ」「もしも、男性によるフェミニズムの実践が有り得るならば、それは男性中心文化、父権制社会の自己解体だろう。」——こんな発言が出るのも、フェミニズムが今までの社会通念に揺さぶりをかけてきたせいだろう。児童文学の書き手自身が、自分がどういうスタンスに立つのか、何を子どもに手渡すのかを問われている。論のための論に終らせることなく、自らの問題として、フェミニズムを児童文学の視座にとらえて欲しいと思った。

『自分を好きになる本』パット・パルマー 径書房 1545円 / 「日本児童文学5月号」教育出版センター新社 680円
いしだ みるこ 愛知県で「あさひ文庫」を主宰し、児童文学を通して子どもや女性にメッセージを発信している。

ビデオ (教育用)

「セクシャル・ハラスメント

—女からのSOS—

女性にも男性にも「何がセクハラなのか」正しい認識をもってほしい、と女性3人がつくったビデオです。商社の女性社員を巡るドラマ仕立てで展開します。ぜひオフィスや学校にお備え下さい。

プロジェクトおんな組制作 8,800円 送料360円
(松香堂書店で扱っています。)

~~~~~  
連  
載  
~~~~~

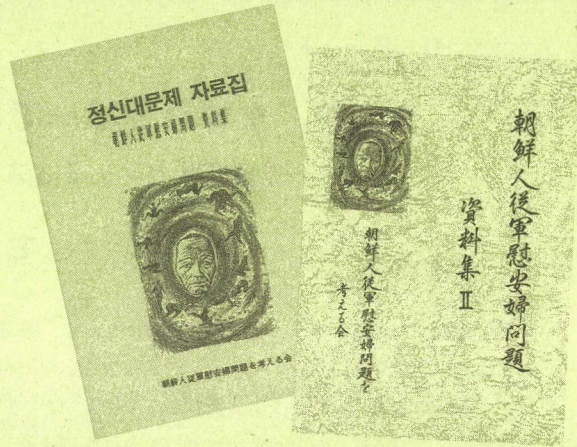
ミニコミの女たち

第40回

〈朝鮮人従軍慰安婦問題 資料集〉

朝鮮人従軍慰安婦問題を考える会

皇甫康子
(ファンボ・カンヂヤ)



韓国、「3・8国際婦人デー」で「今年の人」として選ばれた金学順さん。元慰安婦として初めて韓国で名乗りを上げた彼女の英断と現代への提言は「朝鮮人従軍慰安婦問題」への大きな関心と課題を私達に与えてくれた。

そして、いま、慰安婦申告電話に百名もの女性たちが名乗りを上げ、証言をし始めている。被害者、自らが重い口を開きはじめた契機は、意外にも日本政府の事実すら認めない厚顔無恥な態度だった。また、この恥知らずな政府を支えている日本人、ひとり一人への怒りであることは言うまでもない。

私たちにあって、朝鮮人従軍慰安婦問題とは現在の「在日の女」である位置を規定する根源的な問題を網羅している。

男たちを強制連行し、女たちを慰安婦にし、子どもたちを皇国臣民とする朝鮮民族衰亡を企図した日本の植民地政策は、現在も在日朝鮮人への民族差別となって温存、助長されている。また、「補償は65年の韓日条約で決着済み」という姿勢を崩さない日本政府の非人間的な態度は、戦後、一切の権利から在日朝鮮人を排除した。さらには外国人登録法の実施によって、管理、抑圧を制度的に強いている。

そして、朝鮮人従軍慰安婦問題が半世紀近く放置され、被害者とその被害を告発できなかつた主要因である女性蔑視の意識は、日本社会において在日社会において処断されることなく、意識の深層に根を下ろしている。銃剣をお金に、軍服を背広に変え、アジアの女性を支配、蹂躪する日本の男たちは昔と何等、変わらない。また、買春行為を黙認し、アジアの貧しい女たちを正視しない、多くの日本の女たちの無責任さ、弱さも何等、変化していない。そして、母国でキーセンパーティーを平気で入れる在日韓国人の低俗さもつけ加えなくてはならない。

韓国の女性たちはキーセン観光が横行した1970年代、外貨獲得と奨励さえする韓国政府を糾弾し、日本への抗

議活動を行った。その過程において、買春のルーツはいまだ清算されていない「挺身隊問題」にあるという認識を持つ。ついに、90年11月女性団体によって韓国挺身隊対策協議会が結成された。

女性に貞操を強いる儒教思想が在日社会より強く残る韓国において、女性たちが立ち上がっているのに、どうして、私たちが声を上げずにいられようか！昨年5月、在日女性9人が集り「朝鮮人従軍慰安婦問題を考える会」を作った。知ってはいたのに、「忘れることが思いやり」と看過してきた自分たちの加害性を直視し、民族解放と女性解放の両目を見開いた活動を目指してのスタートだった。昨年8月、私たちは350人の参加者と共に「朝鮮人従軍慰安婦問題を考える集い」を成功させることができた。そして、日本政府に対し、事実を認め、謝罪し、補償し、歴史を語り継ぐという六項目要求署名を在日の立場で呼びかけた。この間、資料集の発行、調査、演劇の上演、講演、アピール、署名運動を通じて、北海道から沖縄まで日本全国の人たちとつながり、3月28日の「朝鮮人従軍慰安婦問題・早期解決を求める署名提出行動集約集会」には370人の参加を得ることができた。そして、署名は3万5千人の声となり、3月31日の対日本政府への提出行動を貫徹したのである。交渉の結果、慰安婦問題については政治決着されそうな危機感を私たちは強く持った。現代を生きる人間の責務として悪夢におそわれ、眠れぬ夜を過ごす挺身隊ハルモニたちに安逸な日々を取り戻さなければならない。彼女たちの犠牲を無駄にしないため、性暴力のない社会をつくるため、この凄惨な歴史を教訓としなければならない。女性の未来をどうつくるのか、議論し、実践するためにも、朝鮮人従軍慰安婦問題・資料集I(300円)・II(500円)を是非、一読願いたい。

連絡先

〒553 大阪市福島区大開4-3-2-305 朴方

現在ウイメンズ ブックストアで扱っているミニコミ

(第42号発行後に入荷したもの)

- 「れ組通信No.59—失われた母を求めてほか」
れ組スタジオ東京 1992年2月 400円
- 「れ組通信No.60—はばたけ・ALN前夜祭ほか」
1992年3月 400円
- 「れ組通信No.61—ファインダーからのぞいたALN前夜祭の実況報告ほか」
1992年4月 400円
- 「婦人通信3月号—告別—ふたたび妻を送るほか」
日本婦人団体連合会 1992年3月 250円
- 「婦人通信4月号—仕事—2～3児の母たちの20年余の軌跡ほか」
1992年4月 250円
- 「婦人通信5月号—私たちの20代—親のこと きょうだいのこと、自分のことも…ほか」
1992年5月 250円
- 「行動する女No.61—国家による性暴力—従軍慰安婦問題の問いかけほか」
行動する女たちの会 1992年2月 200円
- 「行動する女No.62—千代の富士の断髪式に関するアンケート調査ほか」
1992年3月 200円
- 「行動する女No.63—集会予告・連続学習会—性暴力としての「従軍慰安婦」ほか」
1992年4月 200円
- 「わいふNo.235—特集 我が家を手に入れるまで」
グループわいふ 1992年5月 460円
- 「Fifty-Fifty Vol.13—特集 子どもの育ちの周辺」
スペースT・M・K 1992年3月 330円
- 「婦人通信No.240—教育の現場から その国ほか」
社会主義婦人会議 1992年2月 300円
- 「婦人通信No.241—第5回10月集会女性分科会「女性解放と労働運動」ほか」
1992年3月 300円
- 「婦人通信No.242—朝鮮人「慰安婦」問題—二つの集会に参加してほか」
1992年4月 300円
- 「野合Vol.26—新連載 ワキータ島の夜明けほか」
朝倉ふみ 1992年3月 200円
- 「月刊家族第73号—「従軍慰安婦」と「性差別」男の性を問う女たちの「恨」ほか 家族社 1992年3月 300円
- 「月刊家族第74号—特集・アジアの家族と女性が語る家長制」
1992年4月 300円
- 「月刊家族第75号—特集・カード症候群がすすんでいる」
1992年5月 300円
- 「メンズ・ネットワークNo.5—第5回例会報告ほか」
メンズリブ研究会 1992年3月 200円
- 「プロシユーム3月号—特集 看護婦さんがいなくなる」
大阪よどがわ市民生協 1992年3月 330円
- 「プロシユーム4月号—特集 性の教育」
1992年4月 330円
- 「プロシユーム5月号—特集 ストレーナってゴミを洗っちゃうの?」
1992年5月 330円
- 「男もとりたい育児休業」
男もとりたい育児休業集会実行委員会 1991年8月 500円
- 「マイマイ族第21号—特集 女の引越」
鈴木美和子 1992年4月 300円
- 「改訂版 たのしい出生届の出し方」
〈私生子〉差別をなくす会 1991年8月 500円
- 「子どもと私たちをとりまく「ポルノ文化」を問う」
大阪府高校教職員組合女性部 1992年1月 300円
- 「We 創刊号—特集 くらしと教育をつなぐ」
Weの会 1992年4月 500円
- 「あごろ172号—いのちを見守る・夫殺しの事件から」
BOC出版部 1992年3月 515円
- 「東京強姦救援センターニュース第21号—被害と向き合うために(2)ほか」
東京・強姦救援センター 1992年3月 100円
- 「女のためのクリニックニュースNo.82—フェミニズム心理学へのお誘いほか」
ウイメンズセンター大阪 1992年2月 300円
- 「Women and Health in Japan No.3」(英文)
ウイメンズセンター大阪 1992年冬 500円
- 「Women and Health in Japan No.4」
1992年春 500円
- 「もし、強姦の被害にあったら・警察編」
東京・強姦救援センター 1991年7月 200円
- 「買売春と第3世界第9号—少女たちの証言ほか」
ドキュメンテーション 観光、買売春、開発刊行会
1992年1月 250円
- 「いくじなす通信創刊9号—福井不当配置転換あれこれほか」
関西育時連 1992年2月 200円
- 「日米女性ジャーナル第11号—フェミニズムと日本文学ほか」
日米女性センター 1992年2月 2000円
- 「日米女性ジャーナル 英語版No.1—日本女性像の変遷・アメリカにおける日本女性研究に見るほか」
1991年8月 2300円
- 「日米女性ジャーナル 英語版No.2—1980年代の日本経済再編成のなかの女子労働ほか」
1992年1月 2300円
- 「月刊ちいきとうそうNo.256—特集 What'sカラーシ? カラーシ社会とおさらばするために」
ロシナンテ社 1992年4月 700円
- 「おんなの叛逆No.39—特集 朝鮮人従軍慰安婦」
久野綾子 1992年5月 300円

— 書 評 —

『非婚を生きたい——婚外子の差別を問う』



善 積 京 子 編 著

青 木 書 店
(2266円)

目の前に二人こどもがいるとして、だれがその子を見て、一方が「嫡出子」で他方が「非嫡出子」と判断できようか。だれが見ても、二人ともおなじ権利と保護をあたえられてとうぜん、おなじこどもとしか見えない。しかし結婚制度は一方の子に「非嫡出子」の烙印を押し、さまざまな不利益をこうむらせるのだ。これが差別でなくてなんだろうか？

婚外子はなぜ存在するか。なぜ差別されるか。結婚制度があるからである。その制度にしたがわないものは、戸籍・住民票の記載から相続権にいたるまで、あきれるほどあからさまに差別されるのだ。結婚制度はあきらかに抑圧と差別の制度なのである。

ウーマン・リブの女たちはまっさきにそのことに気づき、結婚制度に組み込まれない生き方を選んできた。差別に荷担するのをやめるというだけではなく、自分自身を差別するような制度に、自分からすすんで身をおくなどということは、どう考えてもできないことだったからだ。同時にそのような制度の廃止もめざした。本書はその生き方と闘いの記録であり、日本と外国（スウェーデンとアメリカ）の制度を比較することによって、日本の制度がいかに人権を無視した制度であるかをあきらかにしたものだ。

婚外子にたいする、出生届の差別記載を拒否した窓口闘争、住民票の続柄の記載差別を訴えた裁判、女だけに適用される「再婚禁止期間」のために、父が父と認定されないために生じる不利益など、「体制」を相手にしたねばりづよい闘いの報告を読むと、女たちはここまで力をつけたのだという感動をおぼえる。が、同時に、子捨ての男に日本はなんと寛容なことかとおどろくばかりだ。結婚制度とは男を守る制度なのだ。

スウェーデンでは父が子の扶養義務を怠ったときには、養育費を役所が立て替え、その取り立てを役所がおこなうというが、男女平等がすすんだ国の現実とはこういうものだと、つくづく日本の女性差別のひどさを思い知らされる。

法は現制度を守るものだから、裁判闘争には限界がある。社会を変える力は、わたしたちの生き方を変えることに大きくかかっている。「夫婦別姓」も非婚をつらぬくことで実現しよう。この本を読んで、一人でも多くの人がこの連帯の輪に加わるようにと願わずにいられない。闘いは日常から、解放は足もとから、連帯は力、だから。 三木 草子(教員)

上記の書評欄へ投稿をお待ちしています。

編 集 室 か ら

女性目で見直したい鋭い批評や、視点を変えたユニークなものをお寄せください。

400字詰原稿用紙に約2枚、900字前後です。掲載させて頂いた方には薄々謝、進呈致します。

「あなたの情報・私の情報」とコラム「私の出会った本」は知って欲しい本、御意見等に御利用ください。600字以内。但しこの欄は申しわけありませんが薄々謝も差し上げられませんので念のため。

宛先は 602 京都市上京区下立売通西洞院西入 松香堂書店「ウイメンズ ブックス係」です。

上記両方とも次号の締切りは 1992年7月20日。

◎年々フェミニズム・カウンセリング、セラピーへの関心が高まり、各地にカウンセリングルームも増えています。本号ではフェミニズムの視点（性別役割分業を固定しない）からそれらの関連書を集めてみました。

どうぞご利用下さい。

◎さる4月25日には松香堂書店の10周年記念パーティーが行われました。東京からお祝いにかけつけて下さったお方の10本のバラの花束に感激。たのしい集まりで盛り上がりました。今後ともよろしくおねがいします。

◎次号は1992年8月25日発行の予定です。

(木下明美)